

氏名	朴 沙羅 (ぱく・さら)	所属・職名	
		文学研究科社会学専修	
発表題名	“The Logics of Identification: Fingerprinting and Nationality in Northeast Asia”		
会議名	International Conference of Challenging Citizenship		
開催地	ポルトガル、コインブラ市	参加期間	2011年6月3日～6月5日
<p>発表内容は、戦後直後の不法滞在者たちを事例として、外国人にとって（制限付きながらも）市民権を保証する外国人登録証が、どのようなモノとして闇市場で取引されたり、あるいは外国人差別政策の象徴として攻撃されたりしたのかという変遷についてでした。政策について論ずる発表者が多い学会だったようで、「政策とか理論とかも大事でしょうが、実際に制度を運用するとどうなるか見るというのも重要ではないでしょうか」と言うのが結論です。発表者は発表の2週間前までに事務局へ発表原稿を送付しなければ発表できない、という条件付きでしたので、そういう意味でも「challenging」でした。</p> <p>ただし、最初に日本における外国人数やその国籍別割合といった基礎的な内容について詳しくは説明しなかったため（スライド1枚程度で、解説はほとんどしませんでした）、後ほど質疑応答の際に「今の日本に不法滞在者がどれくらいいるのか」「日本は難民を受け入れていないのか」といった質問を受けました。また、司会からは「あなたの博士論文の中でこの発表はどこに位置するのか」という（わりと教育的配慮に満ちた）質問を頂きました。ただし、最初に日本における外国人数やその国籍別割合といった基礎的な内容について詳しくは説明しなかったため（スライド1枚程度で、解説はほとんどしませんでした）、後ほど質疑応答の際に「今の日本に不法滞在者がどれくらいいるのか」「日本は難民を受け入れていないのか」といった質問を受けました。また、司会からは「あなたの博士論文の中でこの発表はどこに位置するのか」という（わりと教育的配慮に満ちた）質問を頂きました。</p> <p>ただ、発表後に現地の教員の方々と「植民地支配の清算と外国人に対する市民権政策」といった話題でお話しできたのは非常に興味深かったです。「植民地支配をちゃんと終わらせるってどうしたらいいのかしら」という、私とは逆方向からの問題提起を聞いたのは、とても新鮮でした。</p> <p>今回つくづく実感したのは、論文は自分の作品だけれども、学会発表は聞き手の協力を得て初めて成り立つパフォーマンスだということです。前もって聞き手のニーズを想像し、何を一番聞きたいのか、私の発表から何を「お持ち帰り」してもらえばいいか、考えて話さなければならないと実感しました。また、論文を書きながら考えが深まっていくこともあるので、いきなり英語で論文を書くよりも、日本語で細部まで完成させてから英語に直すほう</p>			

が、最終的にはいいものが出来ることも痛感しました。

ちなみに、観光地では英語が通じます。が、普通のレストランや教会では英語が通じないようでした。それから、お料理などは1人前か半人前か聞かれますが、半人前でも大食漢の方以外には多いくらいですので、ご注意ください。どうも食堂で「おひとりさま」だと、かなり不思議がられる文化のようす。また、バスに乗っていたところ、現地の女性高齢者に「ポルトガル、女、一人、大変危険、人々、盗む、盗む」と英語で言われましたので、身の回りのものにはお気を付けください。それさえ気をつければ、気候はよく交通網は便利で物価が安く料理はおいしく大抵の人々は親切な、とてもいいところだと思います。

